

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2026.05.10 定有堂書店 発行

友を選ばば

前半生と後半生のギャップに生きる

奈良 敏行
岩田 直樹

空をみあげて

きのさいこ

日々是雑言(ぞうごん) 16

萩原 俊郎

バベルの図書館を裏返す

板野 円香

多忙

おぎはらきえ

秘湯スタンプ

堀内 菜摘

かいちようの日記

鳥居 貴彦

Art Ensemble Of Tottori

高木 善祥

本を作る側から (38)

村瀬 謙介

論語について (12)

小原 修治

熟成小説

古賀 啓三

学年誌のはなし

ムラカミヒロミ

内坪井町日記 (23)

齊藤 仁昭

私の目指す「言語教育」とはなにか

三浦 永理

たけのこのこの」

あきの素生

友を選ばば

奈良 敏行

(定有堂 主人)

《友を選ばば 書を読みて六分の俠気 四分の熱》(与謝野鉄幹)

ふとなにげなしに、そんな歌を思い出す。

「友」、「書」、「俠気」、「熱」、なにかしら一揃いここにあって、愉快な気がした。俠気⇨初発衝動、熱⇨オブセッション。そしてひたすら書物に浸る。「われにすぎたる(のぞみ)」を共有してくれる「友」もいる。

なぜ書物を読むのだろう。そしてここにいる「友」とはどんな人間なのだろう。自分の意識を起動させる他者をつも待ち望んでいる。例えば、ワイトゲンシュタインはいう。

《世界がどうあるかではなく、「世界が存在すること」自体が不思議である。》

歳を経てようやくそんなことが気になる。広漠な空間に地球がぼっかり浮かんでいる。なぜ落ちないのだろう。

この球の上で永劫に消滅生成が行われている。素材は限られている。「在るもの」が消滅し、また「在るもの」になる。この消滅生成は「在りながら」日常の中で動的に働いている。

《ひとつひとつの「出来事」は文字通り瞬間的な出来事です。無分節が自己分節した姿を一瞬見せる、そしてまたもとの無分節に戻る》（『存在の深みへ』）

井筒俊彦の言葉だが、この事態を存在論的流動性と名付けている。分子生物学的に見れば、わたしたちの身体は時々刻々と入れ替わっているのだ。

若い頃、自分の消滅ということがとても気にかかっていった。わたしが消滅する。しかし世界は何事もなく存在し続ける。これはとても納得のいかないことだった。しかし書物を読むうちにだんだん気がつくことがあった。わたしも動的平衡という仕組みによって、刻々と消滅し生成している。世界も数十億年すればやがて物理的に崩壊する。この知見には恐怖はなかった。年老いているせいもあって、とても素直に受け入れられるものだった。

消滅は怖いものではなくなったが、存在の神秘は考え尽くせぬほど面白いものに思える。考えるのではなく「感じて」みる。「時今」という言葉がある。今この瞬間にいつさいが折り畳まれるという思想だ。ある本を読んでいたら

仮に想像もつかないほど長いフランスパンがあったとする、その角をちよっとかじったら、すべてのフランスパン性を知ったのと同じだ、という話があった。荒唐無稽な例えだが、腑に落ちるものがあった。

動的平衡と時今、わたしはこの二つの概念が視野を広げてくれるように感じる。

スイッチを一つずつ切って、存在の深みと共振させる。自分の身体感覚の現在が立ち現れる。真理は必要ない。真理は切られるスイッチの一つだ。

書を読んで、自分の見当識をつくる。自分の居場所を自分の言葉で理解するのだ。同じ見当識の「友」がいると愉快だ。同じ場所に佇んでいる。どのようにしてこの場所へやって来たのか。その遍歴を語り合うだけで、語り終わる時間は足りないだろう。もともと結論のある話題ではないので、存在消滅の時が来て時間切れとなるのが一番いい。《ダーザイン 現なる今この存在に見開かれ、存在の凄さを目撃する者》

《時は一瞬刹那の生起。瞬時のことである。一瞬刹那の動的生起を、時という》

古東哲明『ハイデガーII存在神秘の哲学』の中の言葉だ。刻一刻性という。「ぼくたちは、毎瞬に死んで、毎瞬に生まれ直している」ということだ。

読書とは言葉を拾いに行くことだと思ふ。心に生じるざわめきを概念化してくれる。すると考えることができる。心の間も言葉にすれば何ほどのこともない。一人の体験でなく共通の体験。友と出会って書物の知見を語る。そしてそこに六分の狭気と四分の熱。

読書に必要なのはそういう磁場だ。そこはまた、狭気と熱を醒ましてくれる場のような場もある。

焚き火の火が消える。その炎はどこへ行ったのだろうか。ある人は言う。炎は鎮まったのであって、どこへ行くわけでもない。時今に折り畳まれるということだろうか。

2026. 04. 10

井筒俊彦『存在の深みへ』岩波文庫 2019

古東哲明『ハイデガー―存在神秘の哲学』講談社現代新書 2002

奈良敏行十三砂慶明

『町の本屋という物語』

作品社 2024



奈良敏行十三砂慶明

『本屋のパンセ』

作品社 2025



前半生と後半生のギャップに生きる

—橋田邦彦、宇沢弘文、福本和夫

岩田 直樹

(再解釈本舗「読む会」講師)

昨年一〇月から定有堂書店ホームページに連載していた「福本和夫 思想の再解釈」がようやく完成した。当初は一〇月から四月まで二〇回の予定だったが、あれもこれもと書くことが多く、結局は週一本ペースで計二六回になった。

なぜ、今、福本和夫(一八九四—一九八三)なのか。理由は簡単で、二〇二六年は福本和夫のデビュー作『社会の構成並に変革の過程』が刊行されてからちょうど一〇〇年目にあたるからである。「福本イズム」が誕生して一世紀が経った。

戦前の日本思想史を読んでいると、必ずや「福本イズム」という言葉を目にする。私の経験では「福本イズム」をきちんと解説した本に出合ったことはほとんどない。よ

くわからないままに記述が進み、いつの間にか「福本イズム」はフェードアウトしている。

きちんと調べてみる価値はありそうだ。『宇沢弘文「社会を治す」—社会的共通資本の再解釈』(二〇二四年、小取舎)を刊行したのが二年前の七月。次は福本和夫論を書こうと思いついたのが九月か一〇月。福本の著作、参考文献を集めるのと併行して、少しずつ読み進めていく。実際に原稿を書き始めたのが昨年九月。約一年半の間、福本和夫にどっぷりつかっていたことになる。

専門的な研究書は少ないながらも。著作集も刊行されている(初期著作集四巻+著作集一〇巻)。しかし、「これ一冊で福本和夫がわかる」といった清水書院の「人と思想シリーズ」のような本は存在しない。そんな本が書けないものか。

文献集めにはさほど苦労しなかった。古本で手が届きそうな金額であれば購入した。鳥取県立図書館には大変お世話になった(福本和夫コーナーがある)。私のような古い世代にとって、ウェブ上でお目当ての資料を探すことができることには毎回感動した。絶版になっている古い本は国立国会図書館デジタルコレクション(NDLDC)、治安維持法関連の裁判資料(手書き)は国立公文書館アジア歴史資料センター・デジタルアーカイブを利用した。

なぜ、橋田邦彦論(『橋田邦彦・アーレント・現象学―生活世界における公共性と倫理』二〇二三年、小取舎、所収)、宇沢弘文論、福本和夫論と書き継いできたのか。

橋田(一九八二―一九四五)、宇沢(一九二八―二〇一四)、福本に共通するのは鳥取県出身ということだけだ。出身地はそれぞれ倉吉町(現倉吉市)市、米子市、下北条村(現北栄町)。「郷土の知られざる偉人」だから調べてみたのか。確かにそういう気持ちもないわけではなかった。

三人の政治的立場はバラバラである。「右」「左」という表現を使えば、橋田は結果的に「右」、宇沢は真ん中より少「左」(リベラル)、福本は「左」である。

医学者であった橋田は、第二・三次近衛文麿内閣、東條英機内閣の文部大臣に就任する。宇沢はよりよき資本主義社会を求めて理論構築に邁進する一方で、成田空港問題を調停するために自民党の大物である後藤田正晴に力を借りる。福本は一貫してマルクス主義者であった。

私が橋田、宇沢、福本に惹かれたのは、前半生と後半生の間にきわめて大きなギャップ(思想的にも境遇も)が存在することに気づいたからである。

橋田は東京帝大医学部教授(生理学者)としてのキャリアを全うし、静かに余生を過ごすはずだった。泉鏡花『日本橋』(一九一四年)の主人公のモデルと言われている

た。しかし、どう考えても政治とは無関係な『碧潭集』(一九三四年)などの著作が権力側の目に留まる。敗戦直後にA級戦犯容疑者に指名され自決。

宇沢は数学者として将来を囑望されていたが、戦後の混乱を目の当たりにして、数学では人を救えないことに絶望する。渡米し、世界的な理論経済学者として経済学(シカゴ学派)を牽引するのだが、ベトナム戦争に反対して帰国。そのままアメリカにいればノーベル経済学賞は間違いないと言われていた。帰国後は、新自由主義と理論的に対決し、「社会的共通資本」論を展開する。晩年は袋小路に陥っていた成田問題に文字通り命を賭して取り組んだ。

左翼思想のトップランナーであった福本は、治安維持法による三・一五事件で下獄。一四年もの長きにわたって収監され四八歳で釈放。ライフワークである「日本ルネッサンス史論」を提唱する。

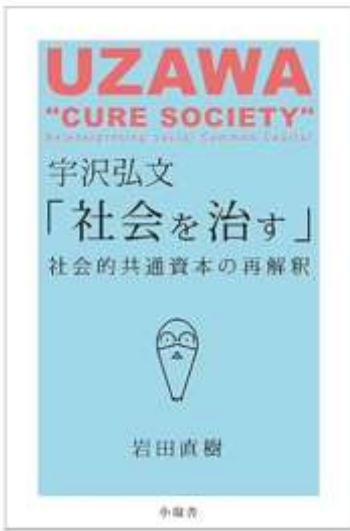
橋田、宇沢、福本ともに前半生と後半生の間の亀裂は政治に翻弄された結果であった。逆境に立ち向かった姿は三者三様であるが、彼らの生きざまはそれぞれにとっても魅力的である。

岩田直樹 著

『宇沢弘文「社会を治す」 社会的共通資本の再解釈』

小取舎 刊

2024年刊



岩田直樹 著

『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈』

小取舎 刊

2023年刊



・2025年10月より定有堂書店ホームページにて連載中。
2026年4月完結。

定有堂書店 <https://teiyuna.coocan.jp/>

岩田直樹執筆

『福本和夫 思想の再解釈』

—「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ

目次

まえがき

序章 「福本イズム」の描かれ方

第1章 マラトとピーピの笛

— 出生から大学卒業まで (1894-1920)

第2章 パリの下宿に籠る

— 就職、留学 (1920-1924)

第3章 サア皈(かえろう)、皈(かえつて戦おう

— 帰国、「福本イズム」の萌芽 (1924-1926)

第4章 福本思想の周辺—日本の社会情勢と右翼思想

第5章 初期3部作を読む—「福本イズム」の誕生

第6章 ルビコン川を渡る(1926)

— 政治活動の開始と日本共産党再建

第7章 福本イズムの失墜(1927)

— ソ連共産党内の権力闘争と「27アーゼ」

第8章 のぞき窓(1928-1942)

第9章 「日本ルネッサンス史論」への道 (1942-196

7)

第10章 「日本ルネッサンス史論」の完成 (1967-196

9)

第11章 「日本ルネッサンス史論」以降—晩年の福本 (1970-1983)

あとがき・略年譜・著作一覧・参考・引用文献

空をみあげて

きの さいり

(鳥取大学 地域学部)

附属芸術文化センター)

春めいてきて、いい季節なこともあり、だんだん朝起きる時間が早くなってきました。昨年湖山池の阿弥陀堂で作品制作をおこなった関係で、日の昇る時間や場所が変わっていくのを感じるようになりました。

私の専門はダンス(舞踊)なので、自然の中に生かされている身体について考えています。舞台表現として考えると、観客の皆さんに喜んでいただけるように踊るのが本来ですが、ダンサーとしての仕事とは自然の大きな揺らぎを感じ取り、見えるようにしていくことなのだろうとも感じます。人間の身体も自然の産物であり、またいつか自然に戻っていくものに過ぎないのです。

そもそも空を見上げるようになったのは鳥取に来てからでした。それまでは劇場やスタジオに朝から晩までいる、日差しを浴びない生活を送ってきた私にとって、大きな変化

でした。最近ではお試し畑仕事をしながら、昔の暮らしは自然と体を動かしていたし、舞台上で踊らなくとも自然と共に踊っていたのだなと感じるようになってきました。自然に日がのぼるのと共に起きるようになり、夜もそんなに遅くまで起きていることはなくなり、おかげさまで生き物としてありがたい環境で暮らしています。

3月にそれぞれの土地での15年目をみに福島周辺を旅してきました。私にとっては2020/21年にプラネタリウム作品のリサーチ以来になります。(2022年に米子市児童文化センターで上演しましたが、再演できないかなと思って模索しています。)双葉町の原子力伝承館に勤めている方は「かつて住んでいたが、現在も家族のことを考えると帰ることはできない」とおっしゃり、街や原発について自分の体験を語るために100km近い道のりを通い続けていると話してくださいました(しかもそういう方が何人も居られました)。バラバラに暮らす地域の人たちをつないで、獅子舞を復活させた話も聞かせてもらいました。小高には「おれたちの伝承館」もあり、それぞれの人の言葉をききました。自分たちの言葉で自分たちの思いを伝え、考え続けることの大切さを感じます。電力会社の中の人も外の人も関係なく、ここでは今もずっと続いている。全く終わっていないし、

はじまったばかり。

ある時当たり前であった日常がなくなるということは、想像しにくいことかもしれません。私も来るたびにいかに自分が忘れていたかハッと気付かされます。その場にいらないとどこか遠くの話に追いやってしまいがちですが、地震や戦争の傷跡をうわべだけなおして無かったことにすることはできません。被害を受けた人々の想いや言葉を引き継ぎ、2度とこのような悲しみを味わうことがないように努めることが、同時代に生きる私の役割でもあると思う旅でした。

今接している子供達は、東日本大震災が起きた2011年の頃は3、4歳で記憶にもないわけで、言葉で説明してもなかなか伝わらないし、イメージもわからないのだろうと思います。計画停電や街灯やネオンが消えたこともピンとこないことでしょう。一つの地震や、台風や、ミサイルが、今ある生活をガラッと変えてしまうことがあるのです。自然災害は防ぐことはできないけれども、少しでも被害を減らすことはできないものでしょうか。

私が見使用しているエネルギーを減らせないかなと思いつながら、今も自転車で暮らしています。

最近の原油不足の報道を見ながら、車や飛行機での移動も考えるようになり(とはいえ福島までは行ってきたわけなのですが)、より一層畑や森にいたるようになりました。そし

てみみをすめます。今できることは、あるいは本当に必要なこととは何だろうかと考えます。資本や武力といった強きで物事を動かすのではない時代になってきたと私は信じています(世の中はますます逆行していくけれども)。

先日佐治を訪れた際、かみんぐさじきさんと和紙の切れ端をいただいたので、つないでとぼしてみることにしました。風がそれほどつよくなくとも、ふわりと舞い上がり、リヒャルト・アルアイールの詩「私が死なねばならないとしても」を思い出させます。たまに風が強すぎるとちぎれてしまうので、天候にもよりますが、5月15日夕暮れ時、砂丘西側(天候不良時は翌日)で再度試してみるつもりです。お時間ありましたらぜひ一緒に。

日々是雜言(ぞうごん) 16

萩原 俊郎

(倉吉市在住)

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

ひたひたと迫る

昨年末に2階のデッキを張り替えたので、春になったら、それを囲むフェンスをペンキで塗ろうと決めていた。フェンスは全長18m、塗るのはかなりの重労働だ。着手したのは、すでに桜も散る4月の半ば。

「いっそ、プロの塗装業者に頼もうか」と音を上げかけたところでペンキのうすめ液(シンナー)が切れ、ホームセンターに行くのと、先週末であったのに1缶もない。

違う店に行くとい「イラン・中東情勢の影響で入荷は未定の貼り紙。」「いや、まいった。ホルムズ海峡のきざ波が、ついにわが足元にもひたひたと迫ってきたか」などと呑気にかまえている場合でない。このままでは、半分だけ緑色という、な

んともご近所に体裁の悪いデッキになってしまふ。ガソリン代を気にしながら隣町まで遠征すると、「おひとり様1缶限り」のシンナーがあった。

「いやあ、危なかった。あと1週間遅かったらもうアウトだった」とその夜、テレビをつけると、日本塗装工業会の会長という人が「もはや仕事にならない。今後、どれだけ塗装業者が倒産するか」と死にそうな顔で話していた。あのフェンス、業者に頼んでもアウトだった。

シンナーはナフサが主原料である。つい4月5日の国会で「少なくともナフサは4か月分確保」と高市は自信たっぷりに答弁していたではないか。「足りないのは供給網の目詰まりのせい。声を上げてもらえれば数日内で解消」(17日、閣議後会見)と赤沢も言っていたではないか。

コメ騒動の時もそうだが、「目詰まり」などと簡単に言う。価格の高騰はともかく、ものがなくなれば商売は終わる。そもそも供給源の問題(ホルムズ海峡封鎖)が解決しなければ、業者は、いくら国にせつつかれても、資材は小出しにせざるを得ない。そんな商売人の心も分からない政治家たちよ。

オイルショックの比でない

中東戦争の勃発による第1次オイルショック(1973)は高校1年、第2次(1979)は大学生の時だから、その記憶はけっこう生々しい。

有名なトイレットペーパーの買いだめはデマによるものだったが、デパートのエスカレーターは停まり、ネオンが消えて夜の街は真っ暗になった。ガソリンスタンドは日曜休業、世の中は「節約・節電」「省エネ」の言葉があふれ、それに緊迫感のある日々だった。

とはいえ、当時の田中角栄首相は、米国の意向に逆らって外交の大転換を行い(「アラブ寄り」でなく「アラブ寄り」と言われた)、産油国から「日本は友好国」と認められて、決定的な供給不足は回避された(国際原油価格の高騰には苦しんだが)。つまり、ホルムズ海峡から一滴の原油も入ってこない今回の危機は、その深刻さでは過去のオイルショックなどの比ではない。

第1次オイルショックで、田中首相は発生翌月には石油の総需要抑制を閣議決定した。ところが今の高市首相は、「必要な量は確保」の一点張りで、なぜか及び腰だ。

パニックにはならない

「首相が節約を呼びかけると国民がパニックになる」と見

る向きもある。バカを言っっちゃあいけない。オイルショックの時も国民は基本的に冷静だったし、東日本や熊本・能登の震災、新型コロナのパンデミック…国民はどれだけ明日をも知れぬパニックを乗り越えてきたことか。

「経済活動にあまりブレーキをかけるような形で、今すぐ節約をして下さいと申し上げる用意はない」(7日、予算員会)。要するにこれが「強い経済」「責任ある積極財政」を掲げて船出したばかりの高市の本音ではないか。

こうした危機には「あわてず、しかし最悪の状況を想定する」、救急医療の「トリアージ」のように、生存に必須な食料、医療、防災から順に優先順位を付け、節約||需要の抑制で「持久戦への力を蓄えておく」のが常道だが、GWを前に日本にそんな空気はない。国民が本当にパニックになるのは、政府が「足りている」「大丈夫」としらを切っているうちに、あの「うすめ液」のように、店頭から突然ものが消える、つまり政府への信頼が揺らぐ時だ。

…と、ここまで書いて、「ホルムズ海峡でイランが機雷を20個以上敷設」「除去には6か月」というニュースが飛び込んで来た。日本の石油備蓄は4月25日現在で210日余り。仮にきょうランプとイランが握手しても(ありえないが)、そこから除去にかかる6か月を引くと、残りわずか1か月分。危機は日に日に深まっている。

バベルの図書館を裏返す

板野 円香

(薬剤師・岡山県在住)

書物が無限に存在する空間を想像してみる。そこには、存在し得るあらゆる事柄が記録された書物が収められている。真理や未来の予言、失われた古代の詩、或いは私の誕生から死までの記録。それらは均衡のとれた書架に整然と並び、書架を収めた空間は、同一の構造に従って無限級数のように果てなく連なっている。そこでは私のいる座標など意味をなさない。

ホルヘ・ルイス・ボルヘスの『バベルの図書館』は、『伝奇集』に掲載されている短編小説である。ポリウムとしては十ページにも満たない短さだが、ボルヘスらしさがギュッと濃縮されており、ボルヘスを聞かれたらまずコレを勧めるであろう、お気に入りの作品でもある。本作にも彼が好んだ、迷宮、鏡、円環といった要素がフラクタルの様に登場するが、とりわけ「無限性」というテーマが色濃く現れている。さて、この奇妙な図書館、おおよそ次のような条件で構成されて

いる。

・ 構造：蜂の巣のような六角形の回廊を一つの単位として構築される

・ 部屋：回廊のうち二辺は別の回廊に接続しており、残る四辺は五段組の本棚で埋められている

・ 蔵書数：本棚の各段には三十二冊の本がおさまる

・ 体裁：一冊は例外なく四百十ページからなり、一ページは四十行、一行は八十文字である

・ 文字：二十五文字の組み合わせ(二十二のアルファベット、コンマ、ピリオド、スペース)で記述される

この条件下から存在し得る本の数(二十五文字の組合せ、頁数、行数、一行の文字数)は次のとおりである。

$25 \cdot (410 \times 40 \times 80) \neq 1,956 \times 10 \cdot 1,834,097$

この天文学的巨人数は、ファンの間では「ボルヘス数」とも呼ばれており、一説によると、論理的に観測可能な宇宙の広さも霞むレベルらしい……ヤバいくらいデカい。

しかし、この無限は「真実を内定不能にする」というパラドックスも内包する。何でもあるぶん、何も無いのだ。天文学的な文字の組み合わせの書籍から意味ある一ページを見出すことは、広大な砂漠から特定の砂粒一つを見つけ出すに等しい。魅力的な無限は、我々の手に触れぬまま終わってしまうのか——一度裏返す必要がある。

国書刊行会発行の『バベルの図書館』(全三十巻)は、イタリアのフランコ・マリリア・リッチ社が、ボルヘスに編纂を依頼した(ボルヘスの私的図書館)ともいうべき世界文学全集である。各巻の冒頭にはボルヘスの序文が付されており、脅威と幻想に満ちた無数のアンソロジィが、ボルヘスの知的宇宙に沿って展開されている。無限から有限へ、読むために選び取られた図書館。幻想、無用性、不条理……小説世界だけで完結しない各作から開かれた無限性を感じ取ることも出来るが、特筆すべきは二十二巻の『パラケルススの薔薇』。ボルヘス編纂であるはずの文学集に、なんとボルヘス自身の作品が編集者の手によってこっそり入れられていたのだ。この入れ子構造により、図らずもボルヘスの目指した無限性が示されることになる。

バベルの図書館はこうして幕を下ろした……にも思われたが、二〇一五年にジョンナサン・バジルというプログラマの手によって、再び我々の目の前に現れることになる。ウェブ上の「バベルの図書館」プロジェクト(<https://libraryofbabe.info/>)である。構成条件は元のボルヘスの小説の定義に従っており、本の中身もアルゴリズムを用いてリアルタイムで生成される。イメージすることしか存在し得なかった無限の全知を、ついに具現化することに成功したのだ。有限から無限へ、存在様式が裏返ったのである。

しかし、ボルヘスの望んだ宇宙式のこの記述は、忠実にも当初のパラドックスを含むことになる。そこに並ぶ大半のページは読めないのだ。意味のある文章は無数の無意味の中に埋もれている。毎日ポチポチクリックしたとしても、解読可能な一ページに出会うよりも前に、私の一生を使い切ってしまうようである。無限は再び手の届かない場所へと退いたように見えた。本である以上、読んでみたい——もう一度、バベルの図書館を裏返す必要がある。

という欲望の果て、「バベルの図書館 mini」というウェブアプリを作成した(文末のQRコード)。「読める」という理念のもと、アルファベットは二十六種類としている点についてはご容赦いただきたいが、「一度も読んだことのない」小説や科学論文の一ページを提供することを約束しよう。もちろん「日本語じゃないと嫌」という方に向け、英語の原文を下にスクロールすると、日本語訳も表示されるよう設計している。眠れぬ夜に。お試しあれ。

〈注意事項：書籍を探索す／本が読めます／ロードがメチャ遅いよ／「本を閉じる」でクリア／小説・ニュース・科学論文からランダムに選出／同じ本は読めない／※APIの關係で一日五回までにしてね〉



多忙

おぎはら きえ (蔭山)

忙しい。何が忙しいって、やらなきゃいけない筋トレとストレッチメニューが増えて忙しい。こういうふうによく書くとジムにでも通っているのか、パーソナルトレーナーなどに指示されてやっているかのようなのだが、そんなことは一切なく、「この筋力が足りてないんじゃない?」という私の思いつき、「こんなふうになりたい」という私の情動、「このストレッチをやったらいいような気がする」という私の勘に基づいて行われている。

数年前に腰痛がひどくなって接骨院に通ったりした。施術を受けたときはよくなるが、またぶり返す。痛みの出方からヘルニアなどではなく普段の姿勢とか、筋肉の使い方とか、運動不足が問題な気がして、ネット情報も参考に、プランク(うつ伏せから前腕とつま先で体を浮かせて支える腹筋トレニング)とヒップリフト(仰向けで膝を立て、お尻を上げ下げする臀部の筋トレ)を毎日することにした。はじめて

二か月ほどで腰の違和感がだいぶ軽減された。

ジャン・ルノワール監督の映画『フレンチ・カンカン』を見た。一八八〇年代のパリを舞台に、かの有名なキャバレー、ムーラン・ルージュの開店を画策する経営者ダンクグラール(ジャン・ギャバン)と、彼にスカウトされ、カンカンでショールに立つべく特訓する洗濯女ニニ(フランソワーズ・アルヌール)の物語だ。

カンカンとは、ロングスカートの下にペチコートを履いた女性ダンサーのショーダンスだ。作中で踊り子たちはギャザーやフリルでボリュームを出したロングスカートを履き、色とりどりの毛で盛り付けられたヘッドドレスで頭を覆っている。肌の露出は少なく、「村娘」というような感じで、現代から見るとやぼったいような気がする。

しかし音楽がはじまるとテンポの速い賑やかな曲に合わせ、踊り子たちはスカートを捲りあげリズムカルに左右に振りながら「ずんずんと前進、自分の頭につま先が届くようなハイキックを連発。勢いよく前転側転、開脚ジャンプ、着地してそのままストンと前後開脚して床に腰を落とす。

このような動きが延々繰り返される。見ているだけで息が上がった。見ているだけで薄筋(大腿内側にある股関節から膝関節をつなぐ筋肉)は引きちぎれ、ハムストリング(太腿裏の筋肉群)は爆発し、大腿骨は股関節からすっぽ抜

そうだった。しかし画面の中の女優たちは楽しそうな満面の笑みでまだカンカンを踊っている。

その夜から、とりあえず前後開脚のストレッチをはじめた。べつたりとは広がらないが、太腿の表裏が伸びて気持ちいい。やった後は脚がすつきりする。

ク・ビョンモ『破碎』(岩波書店)は老境を迎え引退を考える殺し屋の女性が主人公の小説『破果』の外伝だ。彼女の若かりし頃、まだ本格的な殺し屋稼業をはじめた前、ボストともに人里離れた山中に籠り、殺し屋になるための厳しい鍛錬を受けた日々が語られる。ある日、彼女は高い木と木の間に渡されたロープで懸垂をさせられる。まず彼女はこのロープに到達するまでに高い木を自力でよじ登り、「真ん中でぶら下がれ」と言うボスの指示に、素の手を火傷させながらロープを一手一手移動する。すでに体力を消耗している、そこからの懸垂。そして落ちれば無傷では済まされない高さ。さらにボスは「きつさとやらないと切れてしまうぞ」と見事なナイフの投擲で彼女がぶら下がっているロープを少しずつ切っていく。

そんなシーンを讀んだその夜から、懸垂でできるような設備はうちにはないので、とりあえず腕立て伏せをはじめた。膝をついた負荷の少ないやり方だが、毎日続けていると、徐々に回数が増えてきている。

先日、職場で大型の荷物が搬入されるのに立ち会った。正面玄関で、運送業者に裏手にある搬入口へトラックを回すよう指示した。私は建物の中を突っ切って搬入口へ走った。ちよつとマジで走った。体が重い。なんだこの体の重さは！裏手に着いたトラックが待っている、荒くなった息を飲み込み、何てことない顔をしながら運送業者に荷物の降ろし場所を案内した。

腰痛を克服しても、股関節が柔軟になっても、腕立て伏せの回数が増えても、私にはまだやらねばならないことがあるようだ。その夜からゆるいジョギングをはじめた。とりあえず十五分ほど、「歩いている」というよりは、まあ「走っている」範疇に入るくらいの速度で、のんびりと走る。

しかし、のんびりでも走っていると膝が痛くなっている。私はまたストレッチを増やさねばならないようだ。

体秘湯スタンプ

堀内 菜摘 (仙台市在住)

トンネルを抜けると、そこには雪が残っていた。車の窓から、ひんやり冷たい風が入り込む。仙台では桜が散った4月中旬、最上川を眺めながら向かったのは、山形県大蔵村にある肘折温泉。明治元年に創業した「丸屋旅館」に招待してもらい、1年3カ月ぶりの訪問だった。

招待の経緯は3年前にさかのぼる。友人と島根県雲南市にある「海潮荘」に泊まった際、「日本秘湯を守る会」というものに出合った。同会は50年前、「秘湯」という言葉を生み出した故岩木一二三さんの呼びかけによって、バスも通わない山奥の温泉宿が集まりスタート。日本の原風景や、古き良き温泉文化を守ろうとする約150軒の宿で構成されていて、「海潮荘」もそのひとつだった。

「ぜひ集めてみてください」と女将から手渡されたスタンプ帳には簡単なルールが書いてあった。「スタンプが100個た

まりましたら、こちらのスタンプ帳に押印のある宿から1泊ご招待いたします」と。「なんてお得なの!」。関西魂に火が付いた。期限は3年。スタンプ集めにいそしむ日々が始まった。

3年かけて、宿オリジナルの趣深いスタンプを100個集めた(都道府県順)。

①岩手・須川「須川高原温泉」、②宮城・青根「湯元不忘閣」、③宮城・鎌先「最上屋旅館」、④山形・肘折「丸屋旅館」、⑤栃木・奥鬼怒「八丁の湯」、⑥鳥取・岩井「岩井屋」、⑦島根・海潮「海潮荘」、⑧熊本・弓ヶ浜「湯楽亭」、⑨大分・飯田高原「山の宿寒の地獄旅館」、⑩大分・壁湯「旅館 福元屋」

それぞれ特徴のあるいい湯で、土地の名産を使った食事がおいしく、それでいてリーズナブル。そして、長く愛される宿にとってかせない「おもてなし」が一級品だ。

温泉を目指して、山道や雪道を何日も歩いた先人たちの疲れた体に、女将の「いらっしやい」はどれほど染み渡っただろう。学生時代に別府温泉の旅館で働いた経験があるから、よく分かっているつもりだったが、秘湯を巡るように

なつて、おもてなしのありがたさをより実感するようになった。

徒歩では向かつてはいないものの、秘湯に癒やされたり、寿命が縮まったりした体験をいくつか紹介したい。

②「不忘閣」は、伊達家御用達の宿。仙台を見渡せる高台の部屋から、戦場を見ていたという。飾られた伊達家の甲冑が歴史を感じさせる。

五つの風呂のうち、明治初期に建てられた蔵にたたずむ、ヒノキ風呂の美しさに息をのんだ。ヒノキの香りと照明に照らされた湯気に包まれ、お殿様気分です呼吸。あの時の高揚感は忘れられない。お酒もおいしく、まさに「忘れじ」の宿になった。

⑤「八丁の湯」では不思議な体験をした。カモのしゃぶしゃぶを食べた部屋に、シカの皮がつるされていて、黒く輝く爪に「ひやつ」となった。その夜、寝ている私に、さばきたての生温かいシカの皮がかぶせられるような感覚になった。「ギャー！」と叫び、目を覚ますと、ビックリして立ち上がった友人が、私の顔をのぞき込んでいた。体には茶色の毛布が

かかっている。夢うつつ…。今でも生温かい感覚に身の毛がよだつ。

⑧天草の海に囲まれた「湯楽亭」は、温泉が湧く夢を見た一家が掘り当てた温泉があり、全長333メートルの手彫り大洞窟風呂が名物。熊本地震の被災から復活した「赤湯」には「全国に1%」と言われる成分が含まれ、すべすべ肌が1週間も持続する、驚きの泉質だった。近くでイルカウォッチングも楽しめる。

⑨「寒の地獄旅館」は1100メートル以上の標高に位置し、1月に訪れた時にはマイナス8度だった。宿に続く山道を、スリッパしながら、転げ落ちながら運転。「雪がすごかった」。それ以外を思い出せないほど、雪がすごかった。

どこも行きづらく、クマやシカに遭遇することもしばしば。電波が届かない山奥では、五感が研ぎ澄まされ、同じ温泉に入った先人に思いをはせることができる。どんな思いで秘湯を目指し、どんな顔をして湯につかったのだろう。そんな時間が有意義であり、楽しい。まだ知らぬ「秘湯」と物語を目指して、スタンプ帳2冊目の旅に繰り出す。

かいちよづの日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

春、今年も桜はきつきと散ってしまった。京都を抜け出して淡路島に遊びに行く。窓を開けてクルマを走らせると玉ねぎの匂いが車内に流れ込んでくる。いくら名産品だからといってそれは大袈裟ではと自分でも思うのだが、どう考えても淡路島の風は玉ねぎの匂いなのだ。

気がついたらPTA会長というものになっていた。会長になるといろんな人に冷やかされるということをはじめて知った。すれ違いざまに「カイチョウじゃないですか〜」と声をかけられる。「友だちのお父さんがやってたなあ。スーツ屋さんの親父さんで」と遠い目をされる。熊本で教員をやっている友人は「お前、運動会でばんぎーい！ っするんか」と驚いている。なんだそれは。熊本だけの風習だろうか。少なくとも僕の通っていた小学校ではそんなことなかったと思うし、今のところ万歳してくださいという依頼はきていな

い。秋になるのがちよつとこわい。

最初の仕事は入学式で祝辞を読め、というものだった。なにを言えばいいのかわからないので夜な夜な風呂であれこれ考える。校長先生がやってきた。聴覚に障がいを持つ子どもたちのクラスがあるので、つかいモニターに文章を映すのだという。事前に原稿を提出してほしいとのこと。あと四日しかない。どうにでもなれという気持ちで文章を送る。

祝辞

一年生のみなさん、ご入学おめでとうございます。PTAを代表して、一言お祝いを申し上げます。

みなさんは『ぶたぶたくんのおかいもの』という絵本を知っていますか？ 知らない人はぜひ読んでみてください。私も小学生のときにこの本と出会いました。ぶたぶたくんというこぶたの男の子がおつかいに出かけるおはなしです。歌を歌いながらうぎげんに歩いていると、お友達やパン屋さんや、ヘリコプターなんかと出会います。あらためて読んでみて、外に出かけるということは、新しい出会いにあふれているということかなと思いました。

みなさんもこれから先、学校に行くとき、帰るときあるいは遊びや習い事に行く途中に、「こんには」とか「おかえり」とか声をかけてくれるおとなの人がいるかもしれない。もしかしたら「声かけん」としてよ」とか「なんて答えたらいいかわからへん」として不安になるかもしれない。そういうときに、ずっと元氣よく「ぎげん」にいられるとは限りません。答えられない時はちゃんと答えなくていいんです。僕も小学生の時は知らない大人にあいさつされるのちよつとイヤでした。イヤだなど思いながらうつむいて歩いていました。今でもそうです。はじめて出会う知らない人って、緊張します。でも、自分が大人になって、なんで大人の人がみなさんにあいさつしたり声をかけるのか、ほんの少しだけわかってきました。それはみなさんが小学校に通ってくれていることがうれしいのだと思います。今日も学校に通ってくれてあげがとうという気持ちを込めて、「おはよう」とか「おかえり」として声をかけてくれるんだと思います。そのことは、知っておいてください。だからといって、ちゃんと返事しないといけないことはありません。自分の気持ちにフタをする必要はありません。心の中で「なんかゆうたはるなー、うれしーいかなー」と思っていてくれたらいいです。それも出会うのひとつです。これから先、きつというんな出会いがあります。ひとつひとつを大切にしてくださいね…

知っていますか？ と問いかけたところでふと目をあげると、一年生たちが全員そろって首を横に振っていた。とてもいい景色だと思った。

次の依頼は創立三十周年記念式典での開会宣言だそう。なんの話をするれば全校生徒が一斉に首を横に振ってくれるだろうか。式典はもう一週間後だ。風呂の時間はいくらあっても足りない。

開風社待賢ブックセンター

〒602-8125

京都市上京区大宮通榎木町上る菱屋町818

080-3166-1385

<http://www.kai-fusha-books.com>

Art Ensemble Of Tottori

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

二月の半ばに、「魚をさばいてみんなで鍋を囲む会」に参加した。鳥取県立美術館で開催された企画展「コネクションズ」に参加しているアーティスト・Eさんの主催で、参加者はほかにトークイベントに登壇する美術批評家・学芸員・ライター・デザイナーなど。

お店を閉めた後、近所のスーパーでビールとノンアルとノンフトドリンクを買い、会場へと向かう。倉吉からくるメンツが遅れるとのことで、まだほとんど準備が進んでいない。ひとまずストーブに灯油を入れたり、食器を運んだり、出来ることを手伝う。そうこうしている内にメンバーが増え、つまみが出され、なんとなく始まる。

画家のKさんが、力強く、そして鮮やかに魚をさばいていく。以前はイタリアンレストランで働いていて、常連客の自宅に赴いて提供することもあったそうだ。どうりでトークが

上手い訳だ。

しゃぶしゃぶでもあり、鍋でもある、そんな同じ釜の飯を食い、いろんな人とたくさん話をした。たぶん芸術やそれに付随する仕事に関する話題が多かったと思うが、なぜか記憶がない。(ちなみにこの日私が飲んだのはノンアルビールのみ)

翌日も仕事だったため途中で退席したが、たくさんの料理が出続け、日付が変わっても続いていたらしい。

現実離れた一夜だった。

*

この謎の会で同席した学芸員の方から、

「鳥取県立美術館のコレプレ書いてもらえませんか？」

と打診をいただく。「コレプレ」とは、美術館のコレクション展示からインスピレーションを受けて音楽・プレイリストを作る企画だ。共通の友人から私が音楽好きなのを聞いてのオファーということで、ありがたきお受けする。

日を改めて美術館を訪れ、ポップアートと器ほか・前田寛治・花をモチーフにした絵画や陶器と、テーマが異なる三つの会場を二周した。

その場ではメモ程度におさめて店に戻り、記憶を反芻しながら展示にふさわしいと思う曲を選ぶ。意図した訳ではないが、世代感が出る選曲になった。

出来上がったペーパーは今も店頭で配布中。美術館のウェブサイトで公開されていて、他の方の選曲も楽しいので、気になる方はぜひ。

*

いつもお世話になっている元・学芸員の友人と、店を始めてから知り合った編集者の方と三人で飲み。

話題は多岐にわたったが、その中で気づいたのは、私は「本好き」である前に「音楽好き」だったことだ。

母と九つ離れた兄の影響で、小学生の頃からジャズやブルックミュージック・洋楽を聴いていた。かといってそここのめり込むわけではなく、八〇年代のアイドルや日本のロックバンドも楽しむ。また当時ワールドミュージックも流行っていたので、アジアやアフリカの音楽も聴くようになった。

中学生まではマンガばかりで、本をまともに読むようになったのは高校生からだ。たぐさんの音楽を聴いていたおかげで、それぞれの国の文化や歴史へと興味が広がっていった。

本屋を始めてからも、常に「文化と社会／政治の関係を念頭に置いている」。

*

この日の飲み会で、美術評論家の榎木野衣が九〇年代初頭に創刊した音楽雑誌を話のネタに持っていく、友人二人

が熟読していたことを付け加えておく。

【参考文献】

『日本・現代・美術』榎木野衣 ちくま学芸文庫
日本美術評論の到達点、と言われている。ナカグロ必須。

『鏡・空間・イメージ』宮川淳 水声社

どの媒体だったか覚えていないが、『日本・現代・美術』刊行時、この本を念頭に置いていたという発言があったのを記憶している。これも名著。ちくま学芸文庫で復刊してほしい。

『ストリートの思想 増補新版』毛利嘉孝 ちくま文庫
ポストパンクとカルチュラル・スタディーズ／文化研究についてはこれがオススメ。

【リンク】

<https://totori-moa.jp/event/17912/>
Art Ensemble Of Totor

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

本を作る側から (38)

村瀬 謙介

(小取舎)

ひょっとして小取舎ってすごいことをしている？ と思うことがあった。少し前から版元ドットコムという出版社による会員制の団体に登録しているのだが、結構な頻度で情報交換がされていて、その中でアウトソーシングのことや、外部デザイナーとのコミュニケーションのためにインデザイナーの基礎を学びたいがどうしたら良いかなどの悩みを相談している出版社の代表が多い。社内でDTPができるのが普通だと思っていたが、経営だけをしている方も多いのだなあ。まあ企業としてはそちらの方が普通か。そうなのだ。小取舎が異常なのだ。少し前に電子書籍の出版のみをされている出版社から Amazon 販売をしてくれないかというお願いが人づてにきた。いや、出版社だったら自社でなんとかしてくれよと思った。アドバイスはしてもいいけど。と思ったが、一人でなんでも、ましてや経理までやっている方が狂っているのではとも思った。

今の分量の仕事量が私としては丁度良いのか。これ以上忙しくなると時間と体力が足りない。経営戦略や企画、そもその出版に関することの勉強時間がなかなか取れないので、すでに足りていないといえは足りていない。書籍を出して終わりではなく、売るといふことに関しては永遠に在庫が切れるまで続いていく。そして本を出せば出すほどその業務は物理的に増えていく。普通は専門の従業員がいるところを、脳みそのいろんなところを使って本を作っている。

*

のっぴきならないこと以外では最近日曜日の電話には家族以外着信ができないようにした。緊急ならメールやSNSを通じて連絡が来るだろう。育児のために日・祝は仕事をしないと決めている(入稿前はその限りではない)のと、まだ二歳なのに、他の子と比べてうちの子の就寝時間が二時過ぎとかなり遅いので仕事をするにしてもそれから時間となる。集中するためにその時間でも開いているネットカフェに行つて校正をしたり、結構大変だ。それでも休日や七時〜二時過ぎまでの時間を仕事に極力当てないのには理由がある。三人の子供を残し、四二年と少しの人生

を早くで終えた私の父のことを考えると、できる限り息子と一緒にいたいのだ。私も年なので、残り時間を考えると人生が面白くなる三十代後半や四十代からの息子の姿を見ることができるかどうか。今、少しでも一緒に成長を見ていたいのもあるし、その時間を伸ばすために健康には気をつけねばなるまい。独身の頃みたいな締切前は二、三日ほどんど寝ない、みたいな無茶な働き方はごめんである。育児の時間に加えて、もっと余白時間が欲しいところだが。

*

妻が用事がある時は、私が息子と過ごす。城崎マリソールドへ男二人旅をしたり、先日は境港市民図書館へ行っただ。実はそれまでまだ一度も行ったことはなかったのだが、噂には聞いていたとおりの良い図書館だった。ちずの森ちず図書館も好きなのだが、境港市民図書館はかなり大きい公園が真横にあり、図書館のテラスからそのまま繋がっているのも好きポイント。遊具や標高一メートルくらいの高さの丘がいくつもあって（大人にはなんでもないという丘を登り降りするのが楽しいみたい）、楽しそうに遊んでいた。どこかの、役所跡の鳥も来ないパークと違って、子供が走って車道に飛び出す危険もないので親も安心して見ていられ

る。図書館の絵本コーナーでは書架と書架の間に小さい子供でも座れる高さの、親と子が座れる絶妙な幅のベンチがいくつか設置されており、息子が選んだ絵本を一緒に読んだりして過ごした。息子と一緒に本が読めるのがこんなに幸せなのか。次から次へと自分で探してきて「読んで」と持つてくる絵本が工事車両の絵本ばかりというのも気になるところだが、今は良いとしよう。

小取舎の最新刊

『保育者をめぐるあなたへ――先人に学ぶ保育者論』

塩野谷齊・青木幹生
編著

本体一五〇〇円

発行 2026.3



論語について (12)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

子貢欲去告朔之餼羊。子曰、賜也、女愛其羊、我愛其禮。

(八佾篇第三・第十七章)

子貢 告朔の餼羊を去らんと欲(ほつ)す。子(し)曰(い)はく、賜や、女(なんぢ)は其(そ)の羊を愛(おし)む、我は其(そ)の礼を愛(おし)む。

子貢が「告朔の餼羊」を取り去ろうとした。「告朔」は、月の初めを宗廟に告げる儀礼。「餼羊」は、儀礼に用いる生きた羊。「告朔」の礼は魯の国では既に形骸化しており、「餼羊」は不要だと考えたからだというが、そう考えたのが弟子の子貢とされるのが面白い。そうした合理的な判断を下すのに最も相応しい人物だからである。先進篇第三章には「言語には宰我、子貢」とあるが、言語能力の高さと合理的な判断

とは通じるものがあろう。宰我の方も、陽貨篇第二十一章に「宰我问、三年の喪は期已(す)で」に久し。君子三年礼を為さずんば、礼必ず壞(やぶ)れん。三年楽を為さずんば、楽必ず壞(やぶ)れん。(中略)期にして已(や)むべし」とあり、親を弔う三年の喪を一年に縮めるよう提案し、孔子にたしなめられている。これもまた、本章と同様に、合理的な判断による提案であろう。

ともあれ、なぜ孔子は「告朔の餼羊」を取り去ることに反対したのか。ここで想い出されるのは、近年、人類学で提唱されている「存在論的転回」である。近代西洋由来の人間中心の社会構成主義や文化相対主義を批判するもので、人類学者ヴィヴェイロス・デ・カストロの多自然主義や社会学者ブルーノ・ラトワールのアクターネットワーク理論が有名である。殊に後者は、社会は人間だけでなく、自然や動物や道具などのアクター(行為主体)間のネットワークによって成り立つと考えるもので、そうした非人間中心の世界観こそ人類の普遍的な文化だとするのである。

右の主張が正しければ、「論語」における「礼」もまた、そのようなものとして在る。本章で言えば、「告朔の餼羊」は「礼」におけるアクター(行為主体)の一人なのである。よって、それを取り去ることは、「礼」を無にするに等しい。このことを理解する孔子は、理解の及ばない子貢に対し、「我は其

「その礼を愛(おし)む」と述べたのである。

そう言えば、雍也篇に「子曰(いは)く、觚 觚ならず。觚ならんや、觚ならんや」という章句がある。これは「礼」に用いる「觚」いう祭器がもはや原型を止めていないことを孔子が嘆いた言葉だとされるが、ラトウールが主張するように、道具もまたアクター(行為主体)であるとすれば、人間が勝手に「觚」の形を変えることもまた、「籛羊」を取り去るのと同様に、「礼」を無にするに等しいのだろう。

こうした「礼」に対する認識は、「仁」に対する認識をも改めさせるものである。この点、F・フィンガレットは、「個の場」という論文でこう述べている。「へ礼」が伝統的・社会的な行動と関係の型を強調するのに対して、「へ仁」はこの行動の型に従い、その関係を維持しようとする人物を強調する。「へ礼」がまた、不変の規範の具体化として位置づけられる特定の行為に関わるのに対し、「へ仁」は、その人物の性向、つまり「へ礼」によって規定された特定の行為への彼自身の関与を表わすものとしての行為に関わる。「へ礼」が言及する行為が一連の行動の明瞭判明な型とすれば、「へ仁」が言及する行為は役割を演ずる者の個別の個人的行為である(山本和人訳『孔子 聖としての世俗者』)。

ここでフィンガレットは、「礼」を「伝統的・社会的な行動と関係の型」と捉え、「仁」をその「礼」に基づいて規定された特

定の「役割を演ずる者の個別の個人的行為」に関わるものと捉えている。それ故、フィンガレットは、同論文で『論語』のなかの孔子の用語を心理的に捉えてはならない、「孔子にとって精神的なものとは公的なものであり、「外面的なものであった」「へ仁」は(一度「礼」に従うだけの客観的技術さえ獲得すれば「へ礼」に従おうとする者の決心の問題であり、どうすれば「へ仁」に至るかをことごとまかに分析する必要はない)とも言っているのである。これらはいずれも人間をアクターと捉えての発言である。

顔淵篇第十一章には齊の国の景公から「政」とは何かと問われた孔子が「君、君たり。臣、臣たり。父、父たり。子、子たり」と答える一節がある。陳腐な回答のようだが、以上の議論に照らせば、「礼」と同様に、アクターとして各自の役割を演じること、それが「政」だと言っているのである。

「礼」もまた、役割を演じること成り立つものである。演じる決心さえあれば、自己の内面はむしろ不要であり、「仁」が「克己復礼」であるとは、そういう意味だろう。そして各自そうすることで事は治まる。そうした無為自然と言うべき状態こそ、孔子が理想としたものなのである。

熟成小説

古賀 啓三

(米国ミシガン州在住)

奈良さんに、定有堂の読書室ピオトープ参加を勧められ、こちらの時間で早朝五時開始というのが、やや修行的様相を呈しているのを除けば、新鮮で刺激的な体験に満ちていて、お誘いに感謝。

これに参加してなかったら、まず絶対読んでなかっただろう、という本に出会えるのがあるがたい。しかし、グループが、集合的に向かう方向に従って課題本を読めているかという、かなり怪しい。例えば、初回参加させていただいた際の課題本は『言語化するための小説思考』であったが、まず僕の興味を捉えたのは、筆者が小説を、「言語を用いた芸術」と考えているらしいこと。「小説家は芸術家としての振る舞いと、商人としての振る舞いを求められている」などとも書いている。僕はこの小川哲という作家の小説を読んだことがないので、なるほどこれなら芸術だ、という認否ができない。僕は昔、絵描きになろうと思ったことがあり、絵

を描いているときは、オレ、イマ芸術シテイル、という(根拠のない)実感を伴っていた。しかし小説を書くようになり、それも多少コツのようなものも掴みかけた気になって、書くことが面白くなればなるほど、コレ、芸術トイエルノカナ、と疑心を抱くようになった。

Discipline という言葉があつて、語義的には、上位に、規律、しつけ、克己心、と並び、これから話す「分野」、という使い方は極めて下の方。一時流行った「学際」、の Cross-Disciplinary はこの意味での使われ方。美術だと What type of discipline と聞かれると、油彩です、とか彫刻です、とか答える。とち狂って、僕は Writer でした、などと自己紹介してしまい、へー、そうなんだ、で、どういふ discipline と聞かれ、はい、無論純文学です、と答えて胸を張る、とかあるはずもなく、そもそも、「規律」だの「克己心」だのから派生した言葉による質問は、自分のしている、オモシロオカシイ、遊びのような行為にそぐわない、故に小説は芸術ではない、という理屈は、やや牽強付会気味だが、幸いに、というか、自分は物書きです、という者に対して、どういふジャンル? という意味で、What type of discipline、という質問の仕方は普通しない。視覚美術方面の人に対し、あなたの媒体は、という意味でなら使う。なんでだろ。差別じゃん。小川くん、やっぱり言葉の芸術など

というのは幻想なんだよ。コレ、芸術トイエルノカナ、などとわだかまっていた割には、そうじゃないことが確定すると不愉快である。と、まあ、確定は言い過ぎだとして、世間にも、美術に対しては、無条件に「芸術」だけど、小説だと、うん、ものによるんじゃないかね、という留保はありそうだ、ということでしょうか。

四月末開催の読書室課題本は、メルヴィルの『書記パートルビー』。この課題本を読んで僕の心を捉えたのは、「小説って芸術じゃん」という揺るぎのない事実であつた。

この作品が書かれたのは一八五三年、本邦では、ペリー提督浦賀に黒船で強行上陸の年、夏目漱石の短い活動期の半世紀ほど前、である。

いつの間にか自分が年寄りになって、歴史(の長短)に対する感覚というのは、自分の人生(の長さ)と相対的なんだな、と感じるようになった。江戸時代が二百五十年続きました、といつてもせいぜい人の寿命二回分くらいである。江戸時代が終わつたのは百六十年ほど前の話だが、父が生きていれば九十七歳で、彼が生まれた年には日本は開国からまだ六十年ほどしか経ってない。

課題作みたいな不条理文学っぽい作品は苦手で、繰り返される不条理な行為以上に、それに甘んじる、容認してしまふ人物にイライラしてしまう。不条理な状況を生み出す

元凶となる人物を不条理な行為に駆り立てる心理、および不条理な行為に屈服してしまう自分の心理の、視点人物による解析、というのが当時としては新鮮であつたのかもしれない。今だと、描写しろよ、説明じゃなくて、と貶されるだけかもしれないが、『ボヴァリー夫人』も、『アンナ・カレーニナ』も、ほぼ同じ時代に書かれているが、僕にはどちらも通俗小説だとは思えない。作品が古典として生き残るには、運不運もあるのだろうが、僕にわからないだけで、やはり何か理由があるのだろう。途切れなく異なる角度から論評が書かれ続けるのも、多層的な読み方ができる作品たちである証左に相違ない。しかし何よりも芸術たらしめているのは、内容の良し悪しではなく、これらの作品が二百年以上も前に書かれたという事実。書いた方も凄いが、読んだ方、これを二百年前に読んだ人たちと同じテキストを読める、つていうのが凄い。小説が芸術として昇華されるのに不可欠なのは永劫たる時間なのであつた。悪いか

学年誌のはなし

ムラカミヒロミ

(ライティングブックマン)

かつて、学年誌というものがあつた。

「めばえ」「よいこ」から始まって、「幼稚園」「たのしい幼稚園」「小学一年生」「たのしい一年生」が各学年、「中学一年コース」「中一時代」も高校三年まで各学年(「時代」の高三版は「蛭雪時代」)。

今や、残っているのは、小学生以上は「小学一年生」と「小学八年生(誤植に非ず)のみ」という有様である。

自分自身を振り返ってみると、小学校に上がった年(昭和四十年代である)、「小学一年生」を購読した。四月号の応募者全員プレゼントで「オバQ」ノートを貰ったのを覚えてい

る。漫画は、藤子不二雄「オバケのQ太郎」、手塚治虫「進めレオ(ジャングル大帝)」、赤塚不二夫「おそまつくん」、井上英

沖「サンダーバード」、関谷ひさし、今村洋子など。

表紙は、「二年生」までが玉井力三の絵で、「三年生」以降は、モデル写真になる。

「二年生」は「バーマン」「悟空の大冒険」「キャプテンウルトラ」「冒険ガボテン島」「ガムガムパンチ」ほか。

「三年生」あたりから、芸能人や芸能記事が出て来る。コント55号の露出が大きい。漫画は、「ウメ星デンカ」「ジャイアントロボ」「マイティジャック」「キャプテンスカレット」。

「四年生」で「ドラえもん」の連載が始まったが、一月号からで、しかも上級学年誌に繋がっていないから、ほとんど印象に残らなかった。赤塚不二夫「もーれつア太郎」が始まっている。以降、登場人(獣)物のニャロメやべし、ケムンパスなどがシンボル・キャラクターとして紙面のあちこちに登場してくる。

「五年生」になると、芸能記事の比重が大きくなる。漫画は、川崎のぼるの「いなかっぺ大将」がメイン(「四年生」から連載開始で、「六年生」まで続く)。ちなみに、ニャンコ先生は、本作が元祖(主人公に秘技を編み出すヒントを与えた

猫である)。

男女交際、性教育テーマの小説が始まるのも、この学年らしい特色。

「六年生は、「オバQ」が返り咲き、鈴原研一郎、川崎三枝子など。特筆すべきは、永井豪が起用されていること。調べてみると、全学年を通じて掲載されているから、人気のほどが偲ばれる。

この頃は、小学生の読む漫画も大分様変わりしていて、永井の「ハレンチ学園」、谷岡ヤスジ「ガキ道メッタメタ講座」、ジヨージ秋山「アシユラ」「銭ゲバ」など当たり前であったから、既存路線脱却を図ったのだろうか？

作品は「チャカぼこ」、下ネタこそなかったものの、相変わらず過激な内容で、バスジャック犯を主人公が散々に愚弄して、怒り狂わせ、バスに火をつける、というエピソードもあった。学年毎に別々の話が用意されていたようで、低学年向けは、もう少し穏やかだったとは思うが。

悪書追放運動が盛んな時代であったから、何らかの圧力が？とも愚考するのだが、五か月間の連載で終了する。

ただ、学習雑誌の連載開始・終了のタイミングは不規則

で、実際、同月に終了している別の連載がある。また、作者側も週刊誌の新連載開始の時期と重なった、という事情があるかもしれない。

しかし、「六年生」で最も印象に残っているのは、「みくちゃん」でんだけワイドショー」だ。

漫画家みくきとみが、ラジオDJよろしく、読者ハガキを紹介したり、見学ルポを載せたり、読者交流会を催したり、と当時のラジオ深夜放送を誌上に再現したような内容で、絵柄も力の抜けた線でユーモラス、アメリカン・テイストにあふれ、実に新鮮だった。これを目当てに、同誌を読んでいたようなものだった。

この作者とは、十数年後に再び出会うことになる。「ノーラ」シリーズの御厨さと美で、航空アクションを得意とした、玄人好みの漫画家になっていた。昭和二十三年生まれというから、当時二十三歳。センスが新しくなった。

広告が、カメラ、腕時計、自転車、なぜか電話機、など中学の進学祝いを狙ったような（ほぼ男子向けばかり）ラインナップになっているのも、あからさまでおかしい。

内坪井町日記 (23)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・
元長崎書店勤務)

三月某日

荻窪TOP BEAT CLUBにて初めてのライブ。どうしても行ってみたいライブハウスだったので無理やり上京した。ここはビルごと一から建てたものだそうで、地下にライブハウスがあるのだが、一階にはバー、二階にはレコード屋さんも併設していて素敵な会場だった。ライブ前にレコードを物色。ジエイムス・テイラーとバカラックをゲット。演奏はちよつと難しかったが良しとしよう。

ライブ後にカウンターでビールをたくさん飲む。いろんなビールがあつてうれしかった。いい具合に酔って酔って、佐藤君の住む町へ。この町の酒場もとても馴染む。しばらくライブは休み。しばらくとは言ってもひと月半くらいだが。

三月某日～四月某日

仕事がつまいこといかず胃がキリキリするときがある。断食して調子を整えようとするが、意志が弱すぎる上に、食事をするのがストレス解消になつているので結局ドカ食いして胃腸やらほかの内臓やらに負担をかけて悪循環。体重も増えてきた。

そんなこんなで疲れてしまい、通勤時にいつもは音楽を聴いているのだが、なんだか聴く気になれず。音楽は集中して聴きたいので、それなりに体力を使っていたのかもしれない。自分は運転中に音楽に集中すると、速度が遅くなるのでまあいいのだが、速くなる人もいるよね。

そんな状態だったものだからポッドキャストを聴いている。特に面白いのがふたつあつて、ひとつは廣瀬純氏と鍵和田啓介氏によるポッドキャスト「PARAKEET CINE MASSAGE」。

”公開中の映画をネタバレ上等で語り明かす、真の映画批評に触れられるこの世でただひとつのポッドキャスト”とある。例によつて面白さをうまく説明できないので各位確認されたし。

もうひとつが「ゼーロンの背中」という番組。“評論家・音楽ディレクターの柴崎祐二と漫画家の川勝徳重が、最新流

行現象から遠く離れ、音楽、漫画、映画等いにしえのカルチャーについてあれこれおしゃべりする「あななくろ」ポッドキャスト。反時代的態度こそが前衛となるこの奇妙な時代に贈る、刺激的(教養?)エンタテインメント。”とある。お二人ともお若いのになんだか頼もしく、特に川勝氏の向き合い方というか真面目さが背筋を伸ばしてくれる。

両番組ともスタート時から聴いているわけではなく、最近まとめて聴き出して、全部聴いてしまったのだが、前者は不定期で月に一度の更新があればよく、後者は月に一回の更新なので、次回を待ちわびている。あんまりこういう言葉は使わないが、癒しです。ありがとうございますとお伝えたい。

四月二十五日

名古屋のブラジルコーヒーにてライブ。仕事にかまけていたためまったく練習ができなかったので昼からスタジオに入れてもらう。おそらくみんなら時過ぎに東京から車で出発してきてもらうことになるので悪いのだが、致し方なし。

大須の商店街にあるスタジオをネットで調べて予約した。空港からバスで栄まで向かい、地下鉄で上前津まで移動しそこから徒歩。大須の商店街が面白く、無国籍で雑多な感じ。ブラジル料理、トルコ料理、タイ料理、ベトナム料理、フ

レンチ、喫茶店、いろんな料理屋が路面に密集している。ブラジル料理屋に寄りたかったが時間がなくあきらめる。

楽器屋の併設した、いい感じのご主人がやってるスタジオで、いい調子の練習。いまままでにない感じのセットリストを思いついたのだが、通してみてもいい感じ。

今日は4組の出演で我々は4番目。一組目の小池さんが特にすきだった。出番には客席もだいぶんあつまっており、僕らも炸裂させる。22時過ぎに深夜残業(アンコール)を2度もいただき、働いて、働いて、働いてをさせていだいた。国民の鑑である。

私の目指す「言語教育」とはなにか

三浦 永理

(三十一歳女性)

ロンドンから電車で一時間半ほど、海辺に面した街、ブライトン。真つ青な海が迎える場所で、学会に参加した。

IATEFL(International Association of Teachers of English as a Foreign Language)は英語教育に関する国際的な学会で、四日間にわたり行われた。

ここで自分が楽しみにしていたものが、CELTAのトレーナーである Varinder のセッションが行われることだった。CELTAは私が留学前にとった英語指導の資格で、ケンブリッジ大学の認定資格でもある。夏に東京で会ったトレーナーがロンドンにいることはわかっていたものの、なかなかタイミンが合わず、今回の学会でセッションを行うことが分かり参加することにした。そのセッションのタイトルが「CELTA in Context: Whose standards? Whose needs?」(コンテキストの中の CELTA: 誰のスタンダード? 誰のニーズ?)であった。

二十世紀後半に始まった CELTA のコースは、英語指導した経験のないネイティブのための最初の資格だった。しかし、今では国際化し、現地の制度で英語指導の資格をとっている人も取るようになっていく。英語教員の私のように。しかし、そのとき、彼らの指導経験はなかったことにされる。たとえば、CELTA の中で実施される授業は、生徒数十人程度のことが多いが、実際に受けている受講者たちが受け持つ教室サイズは四十人程度のこともある。コミュニケーション中心の手法がすべからず使えるかという点、現地化が必要になる。そのような意味では、私が受けた CELTA の授業では日本人教員の受講者が多かったので、お互いに「これは難しい」「それはできるかも」などと話せたのは良かった。そんなふうに意識してくれていたトレーナーは最後に、Phillipson のごうごうの「言語帝国主義」がいまだに蔓延り、イギリスの語る英語・その指導法が絶対的な正義になってしまっていること、そのような植民地主義的な態度を通してどのような価値観を押し付けてしまっているかという反省が求められると締めくくった。急にこの間まで受けていた大学院の授業で扱われたキーワードが出てきて、驚いた。理論と実践は繋がっている。

イギリスの研究のベースには、植民地主義への反省がある。西洋中心となってきたことに対する批判として、英語教

育の中でも、「言語帝国主義」あるいは、ネイティブスピーカーの教員を無批判に奨励し、非ネイティブの教員が周縁化されることを批判する「ネイティブスピーカリズム」という概念もある。「言語商品化」という概念では、英語力が商品のように売り買いの対象とされ、経済的な価値があるとされていることを批判している。果たして、英語教育に関する教育者として、どこまで学習者と一緒にそのような問題を考えるべきだろうか。そんなふうには批判されているくらいなら、英語を学ばずに、「AI」が発展するのを待った方がいいのだろうか。

私自身、「ネイティブスピーカリズム」などは、日本語も無縁ではないと思っている。『煌めくポリフォニー』という温又柔さんのエッセイを読んだ。台湾のパスポートを持ちながら、人生のほとんどを日本で生きてきた温さんにとって、日本語は創作活動にも使う言語である。かつて話していたはずの台湾語は日本語のレベルにはならず、中国語での交換留学も、学内選考で他の日本人に負けてしまった。それでも「日本語はあなたのものではない」という態度をとるいわゆる日本人に対して、「自分にとつての母語は何か」という彼女の問題提起は、今私が学んでいる応用言語学的な学問とも重なりがある。

私が参加する最後の日になった三日目の朝、総会で行われたのは、「Reimagining language education for peace in our divided world(言語教育の再構想:分断された世界における平和のために)」というテーマの講演で、紛争のあつたボスニアヘルツェゴビナでの実践内容だった。そこで繰り返された問いが「何のための言語教育か」だった。

私にとって、英語教育もあるいは国語教育も、広い意味での言語教育であり、そしてそれは「教育」という概念の中に内包されている一分野に過ぎない。そして「教育」の中で私が目指したいのは何かと言ったら、この世界の複雑さと曖昧さ、広大さを前にして、それでも前に進む力を持つこと、引き出すことなのかもしれないと思う。それは、言葉を、喉から手が出るほど欲しい自分の言葉を、あるいは言葉にはならないものを、どうやって教育の場が形にできるのか。それはある意味危険なことかもしれない。しかし、それは声を取り戻すことでもあると信じている。

ブライトンの街にある広い空と真つ青な海は、どこか鳥取にいる頃の日常を思い起こさせた。学校での日々に一生懸命だったあの頃を。

たけのこのこのい

あぎの素生

(こうねるめがね)

小学校の通学路のほとりには、竹やぶがあつた。家から小学校までの間の中間地点辺り、フェンスに囲まれた土地の中に、数本の梅や柿などの木と一緒に、竹が整然と生えていたのだ。今思えば、その近隣のお家の敷地内、お庭の一部だったのだが、小学生たちはただ、「竹やぶ」と呼んだ。竹やぶの少し手前から、通学路は家々の日陰になる。竹は電柱よりも背が高く、敷地に奥行きもあるので、いつ通つても薄暗い場所だ。梅雨の時期は独特の青臭さが漂い、それはあまり好きなおいではなかった。竹やぶから先は小学校までずっと下り坂で、だんだんと視界が開けて日が差してくる。帰り道はその逆で、竹やぶまで道を登つてくると、ここまでたどり着いた、あとひと息という気持ちになる。通学路の中でも特別な場所だった。

たけのこが好きだ。年中食べられる水煮もおいしいが、やっぱりこの時期の、旬のたけのこは格別だ。

もともと、たけのこは自分にとって天からの贈りもの(下ごしらえが終わつたものをいただく機会があつたら、それをありがたく調理して食す)だったのだが、スーパードirect売所で皮付きのたけのこを目にするうち、食べたくて食べたくてたまらなくなり、自分で下ごしらえに挑戦してみることにした。

大きな鍋にたけのこがすっかり浸かるくらい水をたつぷり、米ぬかひとつかみと鷹の爪一本入れて湯がいていく。たけのこが浮いてくるので落としぶたをして、水が沸騰してから一時間くらい茹でる。竹串がすつと通るくらいになったら火を止めて、一晚そのまま置いておく。

実際にやってみると、放つておく時間が長いので、恐れていたほどの負担ではない。皮をむいたり、その皮を捨てたり、たけのこを茹でるのに使つた大きな鍋を洗つたりという手間はあるが、目の前にぶら下がつたにんじんならぬたけのこで、モチベーションが保たれた。というのが二年前のことだった。

今年もまた、スーパードirect売所で皮付きのたけのこを見かけるようになった。しかも、けっこうお得なお値段だ。食べたいなと思った。でも、やっぱり二の足を踏む。一度調理

してみても、そんなに手間ではないと知ったはずなのに、売り場に米ぬかが一緒に置いていないから米ぬかをどこかで入手しないといけないしな、とか、そんなささいなことを理由にあきらめたりした。生来のものぐさは、たけのこの皮のように幾重にもやる気を包む。思い返せば、昨年も同じような心持ちで、旬のたけのこのおいしさを放棄したのだった。

そんな中、皮付きのたけのこをいただくという僥倖を得た。ここまで背中を押してもらって、やっと米ぬかを探しに行く気になった。米ぬかは、わりと近くの精米所に持ち帰り自由なものがあり、すぐに手に入った。

米ぬかさえあれば、あとは以前と同様、拍子抜けするくらいスムーズにたけのこのあく抜きが完了した。あの逡巡は何だったんだらう、本当にめんどくさかっただけなんだなど変にしみじみした。

一番好きなたけのこ料理を決めるのは、かなり難しい。季節が限られることもあり、どれもこれも食べたくなくなる。

まずは、たけのこ飯を作る。歯ごたえが残るくらいに刻んだたけのこを、油揚げと一緒に酒と醤油で軽く炒め煮する。粗熱を取ったら、米と炊く。好みの味付けは市販の

白だし。簡単なのに、これがあるだけで当分幸せに浸ることができる。

たけのこわかめの組み合わせで、みそ汁や卵豆腐とあわせたすまし汁を作ることも多い。たけのこは、姫皮の部分を使う。汁の中に鎮座する姫皮の風情が愛らしいし、わかめとの食感の違いが楽しい。

薄切りにしたたけのこを素揚げにして、塩こしょうで食べるのも好みだ。しゃきしゃきとした歯ごたえ、薄くまとった油が旨みを増す。米や汁でかさ増しできないので、たくさん食べたという満足感はなかなか得られないが、その分大事に、噛みしめながら食べる。

たけのこを食べるとき、あの竹やぶを少しだけ思い出す。実家に帰っても車で移動することが多く、たまに徒歩で出かけるときも、明るく大きい道路を通ることが多い。それでもたまに、道幅が狭く薄暗い「竹やぶの道」を通ってみたくなる。そしてその道を通るときには、当時うつらと感じていた畏怖に似た気持ちを感じ出して、懐かしくなるのだ。

「案内」



ドラマメリア (座敷わらし)



定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

定有堂教室「読書室ビオトープ」

それぞれ会場は とりぎん (県民) 文化会館

葉香太極拳クラブ

会場 麒麟スクエア (市役所二階 水曜夜・土曜昼)

・定有堂教室と太極拳の詳細は

下記の、QRコード参照

(@ドラマメリア)



『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階ハンフコーナー

・エスキース (倉吉) ・森の生活者・邯鄲堂・

・Cafe me!low (カフェ メロウ)

・SHEEPSHEEP BOOKS (定有堂ビル2階)

・定有堂ビル2階「音信不通」編集部



・編集後記:

異動して二年間取組んでいたことが二つ形になりました。ようやくガワを作ったところで、中身を詰めていくのはこれからですが、一つの区切りです。

五年ぶりにスマホの機種変更をしました。夕方にはバッテリー残量一桁、音信不通も風前の灯火という状態が解消され、サクサク便利です。なお、リンゴに非ず。

4月中旬に猫のあんずを見送りました。子猫のときから十七年一緒に暮らしたあんずは、身体能力抜群の怖がりの三毛。読書していると肩に上ってしがみついてくるので、口元にもささした毛が触れてくすぐったかったです。好き嫌いの激しい彼女のためにフードを買い集める必要もないし、抜け毛を毎日コロコロする必要もない。寂しい。長い間ありがとう。 ドラメリア(編集長)

QRコード作成 ドラメリア+

「町の本屋という物語」 定有堂書店の43年

・講演案内。講師：奈良敏行

無料。申込不要。乞うご参加。

2026年。鳥取大学地域学部

公開授業講座「地域学入門」。

市民の皆さんに授業を公開。

6月3日水曜日午前10時半から60分。

鳥取大学共通教育棟A20講座室。2階。 奈良敏行(発行人)

http://www.nisibon.jp/j/news/news_detail.php

